「心境」と「心境小説」

――昭和文学の源流――

広嶋　進

はじめに

小西甚一は『日本文学史』（弘文堂、昭和二十八年刊）において、自然主義文芸以後の「大正前期から昭和初期」の日本文芸について、次のように概括している。

自然主義小説が狭い自己身辺のみを対象としたところから、作家の断片的な私生活を素材とする短篇が生まれ、とくに、事件を述べるよりも心境を描くことに眼目をおいたので、（これらの作品は）私小説とか心境小説とかよばれる。そこでは、西欧自然主義のもっていた思想性――科学的実証精神――と社会性は無視され、リアリズムは、作家の感性の世界における印象を微妙に表現する技術としてのみ、すばらしく発達した。（傍点広嶋、以下同じ。『日本文学史』第五章「近代」五）（注1）

小西は、明治四十年代の自然主義小説（例えば『破戒』や『蒲団』）の流行の後「作家の断片的な私生活を素材とする短篇」が多く書かれたが、それらは「事件」よりも「心境を描くことに眼目」を置いたものであった。そのリアリズムは西欧の自然主義とは異質なものであった、と指摘する。そして右に続けてこう述べる。

自然主義の作家たちのみでなく、（大正前期の）白樺派にもせよ（大正中期以降の）理智主義の作家にもせよ、ほとんどすべてといってよいほどの人たちが私小説的傾向をもっていたことは、日本の近代文芸の特殊性と、社会との対決から逃避することによってしか人間性を生かしえなかった半近代的宿命とを示すものであろう。（同書同章）

「白樺派（武者小路実篤、志賀直哉など）」にせよ「理智主義の作家（芥川龍之介、菊池寛など）」にせよ、「大正前期から昭和初期」の「ほとんどすべてといってよいほどの人たちが私小説的傾向をもって」おり、そのことは「日本の近代文芸の特殊性」であると評している。さらに「昭和前期の文芸」に関して、小西甚一は左のように記す。

昭和の文芸をして昭和の文芸たらしめたものは、

横光利一・川端康成らの新感覚派と、プロレタリア文芸とであった。両者とも、私小説的既成リアリズムの否定に出発したことは一致しているが、新感覚派が、都市的な世相を感覚に頼って再現することにより、小説本来の「仮構性」を回復しようとしたのに対して、プロレタリア文芸では、マルクス主義理論によって、小説本来の「社会性」をとりもどそうとした。しかし、ともに、私小説的伝統の歪(ひず)みがどうして生じたかという点の根本的な把握が確かでなく、それぞれ一面的なものになってしまい、結局、挫折の形となった。

かようにして、昭和十年ごろから、文芸運動の低迷空白時代がくる。（同書同章）

昭和前期の文芸は「新感覚派」と「プロレタリア文芸」に代表されるが、両派の作品はそれぞれ「仮構性」と「社会性」を回復しようと試みた。しかし両者ともに「私小説的既成リアリズム」を「否定」することに失敗したとしている。

このように、小西甚一『日本文学史』は、昭和の文学は前代の「私小説」「心境小説」の影響を強く受けており、その強固な枠組みから脱却することはできなかったと述べている。

本稿は、日本近代文学の底流をなす文学思潮――事件よりも「心境を描くことに眼目」をおく文学理念――が、どのように発生し展開してきたかを、「心境」という語の誕生の背景や「心境小説」という概念の形成過程を追いながら明らかにしようとするものである。

一　昭和初年の雑誌『心境』

昭和期に入って空前の随筆ブームが起こった。吉田精一は言う。

昭和時代は随筆時代ともいえよう。（略）日本の文学史のうえでいうと、昭和時代ほど随筆のさかんな時代は近代にないばかりでなく、千何百年の歴史上にないのである。（「昭和の随筆」『随筆入門』第一部十三、新潮文庫、昭和四十年刊）

右の随筆ブームの一例として、私は昭和九年に発刊された日本初の随筆の専門誌『心境』（郷土出版社）を挙げたい。随筆専門誌といっても、『心境』は随筆を主としつつ、いくつかの評論等も掲載されている。

例えば、創刊号（昭和九年四月）では巻頭に吉江喬松、三木清の論文があり、以下に新村出、河井酔茗、森田

たま、唐木順三、馬場孤蝶、窪田空穂ほか九名の随筆が並ぶ。そして巻末には池田亀鑑の評論が掲載されている。

『心境』のバックナンバー（六号まで発行と推定）から「心境」の語例を挙げてみよう。

美人を見る心境は、うれしい。（略）私の心境だけでは、四十の声を聞くと同時に、妙に老い込んだやうな感じがすることは否まれない。（寺田瑛彦「美人と空席」『心境』創刊号）

其大に儲けたところを転用して、自らの心境も豊かにし、（西木子「お芋の煮えたも御存じない」『心境』五号）

右の例から「心境」という語が、昭和初年において現代と同じく「心の状態。心のありかた」の意味で使われていることを確認できる。

また「心境の変化」という言葉があり、現在もよく使われているが、寺田寅彦はこの語句について昭和初年の自著でこう紹介している。

「心境の変化」という言葉が近頃一時流行った。「気が変った」というのと大した変りはないが新しい言葉には現代の気分があると見える。（寺田寅彦「KからQまで」『文芸評論』昭和八年刊）

この指摘から「心境の変化」という語句が昭和初めに「流行」語になったことが分かる（注２）。

「心境」という言葉は、元来「心」と「境（＝対象）」という意味であり、右に挙げたような「心の状態」という語義は後に派生したものである。『日本国語大辞典』第二版（小学館、平成十三年刊）の「心境」の項を引用する。

しんきょう【心境】〔名〕
①心とその対象。＊正法眼蔵（1231-53）弁道話「また、心境ともに静中の証人悟出あれども」＊伝光録（1299-1302頃）仏陀難提尊者「然れば縦ひ心境不二と説くも、猶是れ真実の論にあらず」②心の状態。心のあり方。気持。＊明暗（1916）〈夏目漱石〉一四三「重囲のうちに自分を見出した狐軍のやうな心境（シンキャウ）が」＊彼の歩んだ道（1965）（末川博）四「そのうちに、多少ずつ心境の変化をきたして、積極的に何かやろうという気構えが出てきた」

＊張説・清遠江峡山寺詩「静黙将何貴、惟応心境同」

①「心境＝心とその対象」の初出として『日本国語大辞典』は、十三世紀の『正法眼蔵』を引いている。その用例の「心境ともに」という語句が示すように「心」と「境＝対象」は対立する語であった。一方、②「心境＝心の状態」の初出としては、漱石の『明暗』（大正五年）の一文を引用している。その語例の「狐軍のような心境」は「狐軍のような気持ち」と同義である。

「心境」の語誌に関する論文は、管見の範囲ではまだ書かれてはいない。中国文学研究者の鈴木修次の指摘がわずかにあるのみである。

（『碧巌録』に「心境〈心と境〉未だ忘ぜず」（第二十一則、評語）という用例があるが）「心境小説」などにいう日本語の「心境」が、禅語から出発すると断定することはできないかもしれないが、しかしその可能性もなくはない。（鈴木修次「禅文化にまつわる漢語」『漢語と日本人』みすず書房、昭和五十三年刊）

鈴木は、「日本語の「心境」」すなわち「心の状態」の意味の「心境」が禅語の「心境＝心とその対象」に起源を持つ可能性を示唆している。

石田瑞麿著『例文仏教語大辞典』（小学館、平成九年刊）は「心境」の項を次のように記す。

しんきょう〔心境〕①心とその対象となるもの。認識の主体と認識の対象となる客体。＊秘蔵宝鑰（八三〇年頃、空海、注広嶋）下・八「心境絶泯常寂土　語言道断遮那賓」＊大乗伝通要録（一二四六年、良遍、注広嶋）上・一ノ六「理智既冥、心境玄会」

②心の有り様。心に思っていること。＊沙弥十戒威儀経疏（七六一年、法進、注広嶋）三「依実白師無違心境」

石田は①「心とその対象となるもの」を「心境」の原義とし、②「心の有り様」の初出として法進（中国人僧侶、鑑真の弟子、七〇九年～七七七年）の著作『沙弥十戒并威儀経疏』の「心境」の例を挙げている。これによれば八世紀にすでに「心境＝心の有り様」の語が成立していたことになる。

しかし私の探索によれば、八世紀以降において「心境＝心の有り様」の用例を（後述する明治二十三年の語例に至るまで）見出し得なかった。

例えば、江戸期の白隠（語索引あり）や石門心学の著作や良寛（語索引あり）の著述に「心境」②の語例は見当たらない。

そこで本稿では、明治期以前の「心境＝心の有り様」の語例の通時的な把握は今後の課題とし、明治期以降にその考察の対象を限定し、「心境」の語誌を探究してみることにしたい。

二　明治期の仏書・禅書の「心境」

明治初年から二十年前後の仏教書八十数点を通覧したが、「心境＝心の状態」の使用例は見出せない。

ここに明治二十三年（一八九〇年）に出版された『心境』（平田好、敬業社）という書がある。本書の目次は次の通りである。

目次
仏教
因果
煩悩
善悪
四恩

右の項目によって明らかなように、この書は平易な仏教入門書である。「善悪」の項にはこのような記述がある。

吾人は境に触れて心起り遂に其行為にも善悪の差別を見るものなり（「善悪」）

「心」と「境」は、それぞれ「心」と「その対象」の意味で使われている。さらに次のような文章が記されている。

安心立命の妙果を得て仮令天地崩壊するも無畏の心境は寂（しゅくママ）として動かず（「因果」）

心に悟れる仏智見の境界を窺（うかが）はしむるの舟筏（しゅうばつ）となせり　既に彼岸に達し仏位に至ることを得は復た舟筏を籍るの用なし　済度の法（仏法、原注）此に至消滅す（小見出し「仏法無用の心境」「仏教」）

右の「心境」の二例は前後の文脈から判断して「心境＝心の状態」の意味と考えられる。すなわち、この書では「心の状態」の意の「心境」の語が使われていることになる。

明治三十年代までの代表的な禅宗入門書は左の通りだが、これらに「心の状態」の意味の「心境」は登場しない。

『禅学三要』（大内青巒、明治二十年刊）
『大覚禅師座禅論』（今北洪川俗解、釈宗演和注、明治二十七年刊）
『禅学話問答』（来馬琢道、明治三十五年刊）
『禅学新論』（勿滑谷快天、明治三十七年刊）
『禅学講話』（同右、明治三十九年刊）

右の書において「心境」の語はあくまで「心と境」の意味において用いられている。たとえば『大覚禅師座禅論』にはこうある。

大覚禅師曰く五蘊とは色受想行識なり、心を起して境を見る、（「五蘊」の注）

また『禅学新論』の巻末付録「禅語略解」では「境」の意味のみが解説されている。

境　外物なり。心境相対す。人境相対す。（『禅学新論』）

右の「心境相対す」は、文字通り「心」と「境」が相対立している、という意味である。

仏教書や修養書の著述家であった加藤咄堂は『通俗心経講話』でこう解説している。

心境共に空のまゝに又心境歴然として其相をあらはして居るので主観といひ客観といひ心といひ境といふのは共に現象界のことで（加藤熊一郎『通俗心経講話』「四　実義（上）」明治四十年刊）

右の書では「心境」は「心（＝主観）」と「境（＝客観）」の意味でのみ用いられている。

明治二十三年刊『心境』における「心境＝心の状態」の語例は明治前期において孤立していることになるが、その理由や背景については未詳である。

三　哲学用語としての「心境」

「心境＝心の状態」という語が一般に浸透し、盛んに使われるのは（私の探索では）明治三十九年からである。次のような例がある。

宇宙人生に対する御煩悶のかず〳〵縷々数千言、（略）何時ぞや、予れも幾久しく御同様なる心境に沈吟致し候経験も有之候ものから、（略）常に暗澹たる懐疑の陰雲にのみ藪はれたりし生の心境は二三年このかた漸く天霽れ前途開濶なる光明の神に照され、（納俗仏「友人に答へて煩悶の信仰を説く」『心の友』二号、明治三十九年二月）（注3）

この文章は精神学院が発行する『心の友』という雑誌に掲載されている。精神学院は「精神治療を施し、遠隔療法を行」い、「心霊慰安」を行う団体であるという。「心境＝心の状態」という語が禅宗や仏教の文脈ではなく、哲学や思想の文脈で使用されていることが注目される。

前掲の評論は書簡体で書かれているが、同じく書簡体で発表された綱島梁川の評論を意識して行文されていると考えられる。その梁川の論説は「人に与へて煩悶の意義を説く」（『時代思潮』明治三十八年四月）及び「煩悶の人に答ふる書」（初出誌不明、明治三十八年一月、梁川『病間録』明治三十八年十月刊、所収）である。傍線や傍点で示したように、納俗仏の題名の「友人に答へて煩悶の信仰を説く」は梁川の二つの論文名を踏まえている。

またその内容や文体も梁川の論評によく似ている。梁川の評論を引用する。

御書拝誦。（略）貴下と略々同様なる経験を経来たれりと思ほしき小生に取りては、貴下が目下の御心状、人事とも思はれず候。（綱島梁川「煩悶の人に答ふる書」）

綱島梁川と納俗仏の文章には「煩悶」の語が頻出する。この言葉は明治三十年代後半の哲学や信仰の論説に、繰り返し出現する語彙である（注4）。明治三十年代後半の「思潮の傾向」について述べた当時の評論がある。

操藤村君一たび身を華厳瀑に投じてより、青年間を通ずる思潮は俄然として茲に一変し来れり。啻（ただ）に青年間にみならず、是れを出版界に徴するも、是れを文芸創作及び批評等に見るも、最近三四年の思潮の変動は実に多大なるものあるを認めずむばあらず。曾てラブを謳歌し成功を云為したりし青年は今や急転直下の勢を以て心霊の問題、来世の解決に向つて走れり、（松原至文「青年思潮の傾向（宗教界の青年を警む）」『文庫』明治三十七

年十一月）

右の「操藤村」とは、明治三十六年五月「煩悶終に死を決す」という言葉を残して自殺した一高生藤村操のことである。この自死事件をきっかけとして、出版、文芸創作、批評において「心霊の問題」「来世の解決」のことが「青年思潮の傾向」となったという。

次の文章は明治三十八年六月のものだが、右の論評と同様に、明治三十年後半の思潮傾向をよく表わしている。

既に称して陶冶といふ、吾人は飽まで困難に当り人生を経験し、煩悶苦悩あらゆる風雨と戦て、遂に人間を理解し、社会を達観し、最後に自覚の境に達し、絶対の地盤を見出すに在り。近時青年苦悶に陥るもの多くして道を求むるに切実なるが如きは確かに此大勢を呼び来るもの、必ずや無意義に終らざるを信ずるものなり。（無署名「人格の陶冶」『求道』明治三十八年六月）

この論説は全体として、「人格の陶冶」によって「煩悶」の「境」から「自覚の境」へと青年が到達し「絶対の地盤を見出す」ことを鼓舞している。右の「自覚の境」という語句は、のちの論者ならば「自覚の境地」とか「自覚の心境」と表現する箇所であろう。

このような時代思潮を背景として「心境」の語が（「煩悶」「心霊」の語とともに）明治三十九年以後に多く使われるようになっていったと推定される。

次の引用は時代精神を述べた明治三十九年のものだが、「心境」の語が論文中で繰り返されている。

現実の上に、超然地歩を占めんとするは、達人の心境たらざるを得ず、（略）一切と能く調和する所以、哲人の心境古来皆此の如かりし也、（小山東助「時代を超越するの道」『新人』明治三十九年十月）

四　文芸用語としての「心境」

明治三十九年にはまた、文芸評論において「心境」の語が使われ出す。まず文芸時評の例を見てみよう。

（近時の小説は不振であるが）夫れ国民文学の形成は、畢竟個人の心境の啓発洗練に帰着す、（紫峰「近時小説界の不振」「時評」『新声』明治三十九年八月）

文学作品の興隆のためには「個人の心境の啓発洗練」こそが第一であると主張している。すなわち、「心境」は「啓発」され「洗練」され得るものと把えられていることになる。

次の片上天弦の時評は夏目漱石『草枕』（明治三十九年九月）の評として書かれたものである。

現世に在つて現世を超越する安住の地は、即ち、斯の心境に在りとしたものがこの一篇の『草枕』ではないか。（片上天弦「『草枕』論」明治三十九年九月二十四日「東京日日新聞」）

漱石自身は『草枕』のなかでは「心境」という語を一度も使っていないが、天弦は「心境」を『草枕』読解の最重要語と考えている。漱石は「境」や「境界」の語で、天弦が「心境」と称したものを表わしている。

冲融とか澹蕩とか云う詩人の語は尤もこの境を切実に言い了せたものだろう。／この境界を画にして見たらどうだろうと考えた。（『草枕』六）

そして明治四十年になると、自然主義を主張する評家たちが「心境」の語を多用するようになる。特に片上天弦は前年に引き続き、この語を多く使った。

漱石氏等の作に、現実の痛苦と相亘る心境を見るとせば、それは畢竟現実の痛苦がこの一派の人々を動かして現実を離れ若しくはこれに背き去らんとするに至らしめた点に於いてゞあらう。（片上天弦「彙報」『早稲田文学』明治四十年三月）

（俳諧趣味は）人生根本の問題、最後の真理といふ如き意識を能ふかぎり控除し閑却して、偏へに純美耽溺の心境に止まらんとする（略）一（俳諧派〈漱石・虚子・寅彦の写生派〉のこと）は事象を離れたる心境の表現に興味を感ずる。（天弦「事象当対の感味と俳諧派の新領域」『早稲田文学』明治四十年七月）

解決は、直ちに進んで問題それ自からを解決するにあるか、但しはまた問題を脱離し超越したる別個の心境を拓くに在るか。（天弦「無解決の文学」『早稲田文学』明治四十年九月）

引用から分かるように天弦は、漱石を始めとする俳

諧派の「出世間的」態度を「現実」や「人生根本の問題」を「閑却」する態度と見なし、その表現は「事象を離れたる心境の表現」であると否定的に捉えている。

また『早稲田文学』派の相馬御風や島村抱月、さらには馬場孤蝶も「心境」の語を用いている。

自己の中に分解せる二個の心的活動（知識と感情、客観と主観）が刹那的に融会したる心境を以て、我に於ける自然主義の境致と観れば、客観の事象に我を托し、「我が生命となった自然」の活躍するを正にその絶対境と観るべきである。（相馬御風「文芸上主客両体の融会」『早稲田文学』明治四十年十月）

宇佐美氏といふが（綱島梁川の）追慕の情を捧げた一文を読み、寂光の語を以て故人大悦後の心境を形容するといふに至つて、（島村抱月「梁川、樗牛、時勢、新自我」『早稲田文学』明治四十年十一月）

かういふ容赦も出来ぬやうな心境だったらは、（小説は）大胆に書いても構はぬ。（馬場孤蝶「文芸上の自然主義」『新小説』明治四十年十一月）

右三者のうち、相馬御風の「心境」の例はさきの天弦の「心境」とは異なる文脈で用いられている。天弦は俳諧派の文芸が現実の事象から離れた「心境」を描いたものであるとして批判したが、御風は自己の中において「客観の事象」と「我」が「融会」する「心境」こそが「絶対境」であり、「自然主義の境致」であるとして、「心境」の語を肯定的な意味で使用している（注5）。

続く用例は明治四十一年のものである。

自然主義者の態度は、正に現実界に立戻つた禅坊主と同様である。（略）傍観者として従容逼らざればこそ、其の問題の種々相が明白に解かり、善悪美醜正邪細大すべての姿が心境に映ずるのである。（長谷川天渓「所謂余裕派小説の価値」『太陽』明治四十一年三月）

此の時の気持は正しく禅家のいはゆる湛然の水に真如の月が澄んだとか、花は紅く柳は緑に雨は湿つぽく風は寒く現じて来るとかいふ境である。此に於てかたゞの浮世とは違ふ、一種超越的の感を伴ふことになる。（略）醇芸術的になつた刹那の

心境は、表裏若しくは消積両極面から説くことが出来やう。（島村抱月「芸術と実生活の界に横たはる一線」『早稲田文学』明治四十一年九月）

文芸上の自然主義は冷めた自己が静に世相を観る時の姿ともいへる。禅的文芸と形容してよからう。抱月「冷めた自己」『二六新報』明治四十一年八月二十八日、二十九日）

天渓も抱月も御風の「心境」の捉え方を発展させ、「すべての姿が心境に映ずる」とする。そして「自然主義の態度」とは「現実界に立戻つた禅坊主」の態度と同じであり、「冷めた自己が静に世相を観る」「禅的文芸」であるとしている。

翌明治四十二年には次の有名な文章が抱月によって書かれる。

在るがままの現実に即して／全的存在の意義を髣髴す／観照の世界也／味に徹したる人生也／此の心境を芸術といふ（島村抱月『近代文芸之研究』明治四十二年刊、表紙の言）

抱月は（漱石の『草枕』のように「現世を超越する」のではなく）「現実に即し」つつ、現実のなかにあって「観照の世界」を築き上げること――この「心境」こそが「芸術」であるとしている。

五　禅入門書等における変化

自然主義を主張する評論家たちは自然主義の文芸作品を「禅的文芸」であると言うようになるが、それと呼応するかのように禅宗解説書には「心境＝心の状態」の語が明治四十年代に見られるようになる。

例えば、釈宗演（漱石の臨済宗の師）は『筌蹄録』（明治四十二年二月刊）で左のごとくに述べ、「心」と「境＝その対象」とする。

（仏法の書では）多くは此（人と境）を換へ詞へば、常に心と境を云ふて居る、心は即ち一心、境は万境です、（『筌蹄録』第十九編「臨済禅師四科簡」「二　四科簡の解義」）

ところが、同書中の其角の句の解説においては「心境」の語を「心の状態」の意味で用いている。

其角が芳山の一望唯桜花の爛漫たるを見て「是

は々々とばかり花の芳野山」と云つて居るが、即ち此の心境である。（同書、第十四編「禅の要旨」「一　禅と人性」、素稿は「禅の極意」『成功』明治四十一年六月）

大正期から昭和期になると、禅の入門書等には「心境＝心の状態及び心の境地」の語が散見するようになる。

唯一なる真理を体得した人（道元）の自由にして清朗なる心境、その心境に映った哀れな人間の物欲を、叱責しつつ憐れみ嘆く心、の表現である。（和辻哲郎「沙門道元」「一　序言」『新小説』大正十年七月）

これ（上杉謙信軍が常に勝ったこと）は無論、謙信自身の鍛えられてる心境の発現である。（菅原洞禅「上杉謙信の心境錬磨」『日本禅門偉傑伝』大正十三年刊）

その修業は言語の上の接衝でなくて心境の上の接衝であるから、（略）畢竟、禅は言句を以て説く能はざるものであると見るのが至当の見解であつて、（沖垣寛「禅の真面目」『更正の教育』大正十四年刊）

放捨は休息と同意にて、色にも香にも声にも何にも心を奪はれない精神を統一する心境をいふのである。（中根環堂「坐禅の方法」『本当に活る力坐禅の極意』昭和十一年刊〈昭和十四年再版〉）

それは正に信玄の心境であつた。（略）施無畏（せむゐ）、禅の奥義は施無畏である。畏るゝ無き心境にある。（山田雲林「ビクともしないその心境」『禅学入門の書』昭和十二年刊）

「空」の境地である。何でもない心境である。この軽安の気持こそが、人生至上の幸福なのである。（友松円諦「寂静」『仏教入門』昭和十七年刊）

右の『禅学入門の書』（昭和十二年刊）では、「畏るゝ無き心境」を「禅の奥義」とする。前述した明治二十三年刊の『心境』においても「無畏の心境」という語句が記されていたことが注目される。

六　「心境小説」という理念

「心境小説」という術語がある。文学事典では次のように記述されている。

しんきょうしょうせつ　心境小説　一九二三～二四年ころ、久米正雄と中村武羅夫が使いはじめたことば。中村によれば、作者が直接作品の中に出て来てものを言う小説で、〈花鳥風月に託して己れの感情を詠ずる歌俳諧の境地に近い〉作品をいい、久米によれば、つねに間違いなく自分でありうる心の据えようによって〈私〉をコンデンスし、それを渾然と再生せしめることで芸術となりえた〈真の意味の私小説〉のことをいう。（略）（『日本文学事典』平凡社、一九八二年刊、佐藤善也執筆）

中村武羅夫の主張は「本格小説と心境小説と」（『新小説』大正十三年〈一九二四年〉一月）に、久米正雄の「心境小説」擁護の論は「私小説と心境小説」（『文芸講座』文芸春秋社、大正十四年〈一九二五年〉一月、五月）に掲載されている。

右の通説の補説として、山本芳明は「心境小説」という語自体の初出が大正十二年（一九二三年）五月の中村武羅夫の発言であることを指摘している（注6）。

かふいふ心境小説（宇野浩二と佐藤春夫の小説）を読んで（「創作合評　第三回」中村の発言『新潮』大正十二年五月）

これに対して、曾根博義は『編年体大正文学全集　大正十二年』において注解を加えている。

広津和郎の時評を通覧すれば、早くも大正八年頃から、作品のなかに作者の心や態度がどれだけ直接に、具体的に表れているかを作品の評価の基準にしていたことが確認できるはずである。（曾根博義編『編年体大正文学全集　第十二巻　大正十二年』平成十四年刊）

曾根の指摘をさらに補足するならば、広津は大正八年よりも早い大正五年の段階で「作者の心や態度」を「作品の評価の基準」にするという表明をしている。

私は初めから或る標準を立て、批評したくない。なるたけ各作家の傾向に這入って行って、そして各作家の心境を見て行きたい。（広津和郎「ペンと鉛筆」『洪水以後』大正五年正月）

広津和郎は同じく大正五年正月の時評で、こうも述べている。

（田山花袋）氏は氏が現在到達したと自称している心境に達するまでの、様々な苦痛、煩悶、懐疑、それを切り拓こうとする努力、奮闘等を、象徴的に表現しようとしている。（広津「十二月の創作／田山花袋の「絶壁」『洪水以後』大正五年正月）

広津は花袋作品に「煩悶」とそれを乗り越えて「到達した」「心境」を読み取り、高い評価を与えている。そしてその花袋自身は、批評とは作家の「心境」を読解するものだという考えをすでに示していた。

何を描いても、作家はその心境を磨かなければならない。（略）批評家は、その批評をするに当つて、先づ第一に、何より先に、この作者の心境に入つていかなければならない。（田山花袋「広い空間」『文章世界』大正四年十一月）

花袋は、「心境小説」という言葉こそ使っていないが、小説とは作者が「心境」を磨き、その「心境」を描いたものであり、批評家は作品に表現された作者の「心境」を「先づ第一に」味わい、評価しなければならないと考えていた（注7）。

七　久米正雄の「心境」「心境小説」

久米正雄は「心境小説」という術語は自分の命名によるものだとして、次のように書いている。

心境というのは、実は私が俳句を作っていた時分、俳人の間で使われていた言葉で、作を成す際の心的境地、というほどの意味に当るであろう。（久米正雄「私小説と心境小説」大正十四年五月）

右に言う「心境＝俳人の間で使われていた言葉」については、従来調査や言及がなされてこなかった。そこで「心境小説」という概念の出自を探るため、「俳人の間」における「心境」という語の探索をしてみる。

久米は「俳句を作っていた」と記しているが、これは事実で、彼は明治四十一年（十八歳）から大正三年（二十四歳）まで句作に励んでいた。その間久米は、河東碧梧桐、大須賀乙字、萩原井泉水に師事し、「成れるならば、此の二人（乙字、井泉水）のやうに、俳

人の文学士になりたいと思った」という（「九迷亭自伝」『文芸春秋』昭和十二年正月、二月）。

そこで碧梧桐、乙字、井泉水の俳論や評論にあたってみると、まず、碧梧桐には大正期までの俳論等に「心境」の語は登場しない。

一方、井泉水には次のような文章がある。

彼ら（芭蕉時代の俳人）の俳句はたゞ自分の心持を表白したといふだけのものではない。其の心境を開く為の鍵としてみられるべきものである。（萩原井泉水「芸術より芸術以上へ」大正六年、『我が小さき泉より』大正十三年刊、所収）

ここで井泉水は「心持」と「心境」とを区別して使用し、「心境」という語を「心持」とは違って、より高い次元の心のあり方を指す言葉として使っている。井泉水は、芭蕉等の俳人は俳句という芸術を通して「芸術以上」の「心境」に到達しようとしたからこそ評価されると考えていた（なお、右の大正六年以前の彼の論において、「心境」の語は見出せない）。

これに対して、大須賀乙字の評論では多くの「心境」の語が見られる。

（世間では）俳句は出世間的の趣味で純美耽溺の心境に遊ぶものだといふ位のことだ。（大須賀乙字「明治四十一年の俳句界」『アカネ』明治四十二年正月）

（芭蕉の句では）死に迫った生の執着、その瞬間に見る全体的発展の心境がおぼつかなくしかし力強くうたはれて居る（乙字「芭蕉の人生」『人生と表現』大正二年正月）

俳句作は先づ、其心境に達することが一種の芸術化であつて、句作は第二の技巧に待つ所が多いのである。（乙字「『層雲』記者に与ふ」『人生と表現』大正二年正月）

自然現象に融合されたる解脱的忘我的感情の心境が真の俳句境であつて（乙字「再び月並み研究について」『懸葵』大正五年十一月）

すべて全体的発展の心境に立つて作をする時は、所謂主観とか客観とかいふ区別はあるべきでない。（乙字『俳句作法』大正六年執筆、昭和九年刊）

乙字の「心境」という語の使い方に関して注目すべきことが二点ある。

第一点は、乙字は明治四十二年の段階では「（世間では）俳句は……純美耽溺の心境に遊ぶもの」と記し、「心境」という語を否定的な意味合いにおいて用いていたことである。そしてこの「純美耽溺の心境」という語句は、先に引用した片山天弦の俳諧派批判の一文の「（俳諧趣味は）偏へに純美耽溺の心境に止まらんとする」（天弦、明治四十年七月）を踏まえた文言と考えられる。

第二点は、大正期に入ると乙字は「其心境に達することが一種の芸術化」（大正二年）であるとして〈心境第一〉〈句作第二〉の考えを打ち出し、その「心境」については「自然現象に融合されたる解脱的忘我的感情の心境」（大正五年）と述べていることである。

これは先に引用した御風の「心境」の捉え方――「分解せる二個の心的活動が刹那的に融会したる心境」（明治四十年）と重なり合う表現である。

乙字の俳論はこのように「心境」を重視する自然主義の文学観（御風、抱月）の影響下に成立し、さらに作品よりも作家の「心境」のあり方を重視する〈心境第一〉の考えを打ち出している。

すなわち、久米の言う「心境」とは、乙字や井泉水の言うように、単なる「心持」ではなく作品以上に大切な「心的境地」を言うのであり、また乙字の主張するように（理想的には）「主観とか客観」の区別のなくなった「解脱的忘我的」境地を指すものなのである（注8）。

おわりに

以上のように、「心境」という語は、特に明治三十九年以降、哲学、宗教、思想及び文芸の分野で、「心の状態」という意味で使われ出した。その背景には、「煩悶」からの脱却という明治三十年代後半の時代思潮があると推定される。自然主義の批評家たちはこの語を多く用い、「心の状態及び心の境地」の意味で使用した。

一方、「心境小説」の語は、大正十二年が初出であるが、作品よりも作家の「心境」を第一とする考え方自体は、大正四年の田山花袋の小説論や大正二年の大須賀乙字の俳論にすでに見ることができる。久米正雄の「心境小説」の理念は、彼が師事した乙字の俳論を通して自然主義の文芸理論の影響下に形成されたと推定される。

注

（注1）　引用は、講談社学術文庫『日本文学史』平成五年刊、による。

（注2）「心境の変化」という語句自体は昭和初期以前にあった。例えば漱石の『門』に「それに伴なう心境の変化やらを」とある（明治四十三年執筆）。

（注3）　納俗仏は納武津（おさむたけず）の筆名と推定。納美風とも。明治三十四年東京専門学校卒。早稲田大学教授。著書『聖代の恨事　現代社会の病弊及其根治策』（明治四十四年刊）『民族の研究』（大正八年刊）『民族性の研究』（大正九年刊）『愛国心の本質』（昭和九年刊）等。

（注4）「煩悶」については、平石典子『煩悶青年と女学生の文学誌――「西洋」を読み替えて』（新曜社、平成二十四年刊）木村洋『文学熱の時代』第八章「藤村操、文部省訓令、自然主義」（名古屋大学出版会、平成二十七年刊）に詳しい考察がある。

（注5）　御風はのちに次のように述べており、天弦との相違は明白である。「主客両体の融会――そこに観照の真面目を見やうと思ふのがわれ〳〵の持説である。（略）その人の気分に触れた客観のリアリテイー、そのリアリテイーに凡てを挙げて托された自己全体の気分が表現されるからである。われ〳〵の請ふ所の観照はかう云ふ心境である。」（御風「自然主義論発展の経路」『新潮』明治四十二年七月）

（注6）　山本芳明『文学者はつくられる』第七章「「心境小説」の発生―正宗白鳥の背景を読む」ひつじ書房、平成十二年刊。

（注7）　吉田精一はすでに「文学に於ける澄明な「心境」を強調したのは却つて花袋等が最初なのであつた。（略）人格修養、或は心境錬磨が即ち創作完成の道だつたのである。」と指摘し、花袋の「広い空間」中の文章を引いている（吉田精一『自然主義の研究』下巻、五八五～五八六頁、東京堂出版、昭和三十三年刊）。

（注8）　乙字の俳論や御風の小説論は中世の歌論、特に京極為兼の歌論を想起させる。藤平春男は為兼の歌論に関して次のように述べている。「客観的な事物に触れて主観が働き出し、主客の結合が生じる、その主客の結びつく様態を観照しつつ言語化していく、という創作主体のあり方

を繰り返し説いているのが『為兼卿和歌抄』である。」（新編日本古典文学全集87『歌論集』「解説」小学館、平成十四年刊）

本稿を成すにあたり、山田俊治氏、上原雅文氏、小倉斉氏、永井聖剛氏、滝口明祥氏に御助言をいただいた。記して感謝申し上げる。また早稲田大学図書館、国立国会図書館近代デジタルライブラリーのお世話になった。